



復興の進む唐丹町小白浜地区



小白浜復興住宅



住民懇親会の様子

特集 釜石市社協生活ご安心センターが取り組む地域コミュニティの再生

被災地の絆を育む

東日本大震災津波からまもなく5年が経とうとしています。被災地では仮設住宅入居者、災害公営住宅（復興住宅）入居者、自宅を再建した新規住民など、被災者の居住環境の変化に伴って、地域コミュニティにも変化が生じています。

釜石市社協「生活ご安心センター」では、被災地の住民の「つながりの維持と再生」を目標に、「まちづくり交流会」などを通じて地域の福祉力を引き出し、地域の福祉力を高め、自らの力で歩み始めるための支援に取り組んでいます。

市社協が主催した釜石市唐丹町小白浜復興住宅住民懇親会の様子と、市社協と栗林地区の町内会連合組織と一緒に取り組んだ地域コミュニティ再生を目指したイベントを紹介します。



自治組織に働きかけながら復興期の地域コミュニティを再生

釜石市社会福祉協議会（丸木久忠会長）「生活ご安心センター」は、震災後、人とひと、人と地域のつながりを維持・再生することを目標に、これまで「命をつなぐ支援」「自分らしさを取り戻す支援」「新たな人生課題や生活を支える支援」「地域コミュニティ再生支援」等に取組み、社協の機能と地域の資源を活用して、「つなぐ」「うみだす」「はぐくむ」支援に取り組んできました。

復興期の今、市内では仮設住宅のみならず、災害公営住宅（復興住宅）や自宅再建など、被災者の居住環境が変化し、住民個々の生活と地域コミュニティにも変化が生じています。

このため、生活ご安心センター（職員35人・生活支援相談員、ボランティアセンター、地域コミュニティ係、避難行動要支援者事業の4部門に分かれて活動）では、市内8地区（栗林・鶴住居・釜石・中妻・小佐野・平田・唐丹・甲子）の釜石市地域づくり推進課生活応

援センターと情報を共有。

各被災地区の状況に合わせて生活ご安心センター地域コミュニティ係等が、情報の把握やニーズキヤッチに留まらず、地区の自治組織に働きかけながら、まちづくり交流会などを開催。被災地の地域力と福祉力を高めています。

社協と自治組織によるまちづくり交流会は「住環境の変化から交流機会を失った方々に交流の場を提供すること」「地域福祉や見守りに関しての意識を持ってもらうこと」「災害公営住宅に入居するにあたり、入居者同士の交流の場を提供し、円滑な人間関係が構築されるように働きかけること」などをねらいとしています。

生活ご安心センターでは、被災地の自治組織と連携・協働の道を探り、確認しあいながら、被災者の孤立と不安をなくし、住民同士のつながりをつくり、一人ひとりに寄り添いながら、課題の発見から解決までの「総合相談窓口」の役割を担っています。



釜石市社会福祉協議会
清野信雄
事務局長・センター長



釜石市社会福祉協議会
菊池 亮
地域福祉課課長・副センター長



地域の力を引き出し
地域の福祉力を高める

釜石市社協生活ご安心センター職員が復興住宅に入居した方々に挨拶し、交流を深めました。当日は入居者の皆さんがいち早く集まり、汁物などご馳走の準備に携わりました。

小白浜の新たな コミュニティづくりを担う



釜石市唐丹町
小白浜町内会
佐々木啓二会長

これまで唐丹地区や平田地区などの仮設団地で暮らしてきた30世帯が、やっと地元に戻ることができました。

町内会では震災直後から小白浜復興住宅の建設場所を模索したり、住環境についても行政と協議を重ねてきました。それだけに感慨もひとしおです。

住民懇親会には既存住民や関係者を含む約50人が参加しましたが、入居者の多くが昔からの顔なじみだけに、終始、親交を温めながら笑顔が輝きました。

入居者のうち18世帯がひとり暮らし高齢者です。見守り機能を担い、孤立を防ぐには、生活ご安心センター、生活応援センターのバックアップだけでなく、既存住民の見守り意識が大事と思っています。一方で自宅を再建した新住民も増えていることから、今後は復興住宅入居者や新規住民らと、夢と希望のある楽しい交流会を開催し、互いに歩み寄りながら、新たな地域コミュニティを構築したいと思っています。

笑顔が戻った!! 小白浜復興住宅で初の住民懇談会

昨年10月に釜石市唐丹町小白浜地区の高台に30世帯が入居する「小白浜復興住宅」が完成し、入居者同士の親睦を深める初の住民懇親会（昨年11月3日）が、市社協の主催で開かれました。懇親会には小白浜町内会（会員は約200世帯）が協力しました。

復興住宅に入居した方のほとんどが、震災前から小白浜地区にお住まいの方々です。（※小白浜地区は約200世帯のうち約90世帯が全半壊し、約50世帯は小白浜地区や平田地区など数か所の仮設団地に入居。残る20世帯は町外の仮設や市外へ転居していました。）

住民懇親会は1号棟から4号棟までつながる復興住宅1階の地区公民館で開かれ、復興住宅入居者、

町内会関係者、生活ご安心センタースタッフのほか、地区民生委員、平田駐在所員、唐丹町生活応援センター職員、既存住民ら約50人が参加しました。

市社協の清野信雄事務局長（生活ご安心センター長兼務）は「小白浜地区は住民のまとまりのある地区です。顔の見える関係を大事にして、焦らず着実に新しい生活に馴染んで欲しいと思います。心配ごとは生活ご安心センターのスタッフに気軽に相談ください」と挨拶。入居者の方々と社協スタッフらが用意したご馳走を前に、入居者一人ひとりが部屋の番号や趣味などを交えて自己紹介し、その後はカラオケなどで会場は終始笑顔に包まれました。

4年3か月に及ぶ小白浜仮設住宅での生活を経て、復興住宅に入居したA子さん（78）は「ホテルみたいな環境でたまげました。また、ご近所づきあいができるようにしたい」と笑顔で話しています。

見守り支援と孤立防止

復興住宅に入居した30世帯のうち、18世帯がひとり暮らしです。

また、同地区には自宅を再建する世帯も増えています。

生活ご安心センターの菊池亮副センター長（地域福祉課長）は「住民がつながりと安心を取り戻し、自分の力で歩み始めるための支援を総合的に行っていました。昨年6月に行政のバックアップで個人情報共有も含む被災者の見守りに関する協定を結びました」とし

市社協と栗林町の町内会が「栗林・食の文化祭」で「コミュニティづくり」

釜石市の北西部に位置する栗林地区は人口が約920人。自然環境に恵まれた純農村地帯です。

震災で津波被害は免れましたが、甚大な被害を受けた鶴住居地区に隣接し、比較的広大な土地が多いことから、町内に6団地332戸の仮設住宅が点在。約400人以上の方々が生活しています。また震災後、約30世帯が町内に自宅を再建しています。

釜石市では今後、仮設住宅の集約が本格的に始まる予定ですが、栗林町の仮設団地も集約対象とな

っています。

町内外から300人が参加

住民同士の顔の見える関係づくりと、栗林の魅力を発信する「栗林・食の文化祭」（11月15日、栗林小体育館）は、昨年に続き2回目の開催。栗林町全域の町内会が連合する「栗林共栄会」（遠野健一会長、会員250世帯）と、市社協の共催で開かれ、既存住民や仮設住宅入居者、新規住民、それに町外の方も含めて約300人が参加しました。

たうえて、今後の重点目標に見守り支援と孤立防止をあげています。

なお、復興住宅入居後の孤立防止に向けた支援のあり方を探るため、平田復興住宅で被災3県（岩手、宮城、福島）の社協職員も参加して、「生活支援相談活動管理職・相談者連絡会」を開催。視察と情報交換を行っています。



地元の名産品づくりを目標に、地域コミュニティ再生の一環として開催した「食の文化祭」は、健康体操、柳亭左龍さんの落語、地元芸能の丹内神楽（市指定無形文化財第一号に登録）、バザー、趣味の作品展示、餅まき、地元住民の歌と踊りなど盛り沢山の内容。

また、料理自慢の住民が地元産の野菜、果実、穀物などを使ったアイディアあふれる33点を出展。惣菜や菓子など、地元の自慢料理を発信しました。昼食には豚汁やおにぎりが振る舞われ、子供から高齢者まで参加した文化祭は、笑顔とふれあいに包まれました。



「栗林・食の文化祭」では住民手作りの料理の振る舞いや餅まき、趣味の作品展示やバザー、芸能発表などが行われ、参加者は笑顔を輝かせました。

「生活ご安心センター」スタッフからのメッセージ

自らの力で歩み出す支援を



地域コミュニティ係
荒川弘樹 職員

仮設住宅で暮らしていた30世帯の小白浜地区の住民が、やっとふるさとに戻ることができました。

社協では地域コミュニティ復興支援事業の一環として、地区ごとに「まちづくり交流会」を開催して、地域の力を引き出すよう努めています。コミュニティの再生には知り合うきっかけづくり、支えあうきっかけづくりが必要です。小白浜地区の住民懇親会では、そのきっかけが提供できました。

復興住宅にはひとり暮らし高齢者が半数近くおり、交流促進を継続しながら、一つでも多くの課題を解決したいと考えています。



地域コミュニティ係
太田将人 職員

自治会組織の活動を後方支援

第2回「栗林・食の文化祭」は、「くりばやし夢プラン」実現のひとつとして企画され、住民が実行委員会を組織し、私たちはその後方支援に努めました。

会場では仮設、新規、既存住民の3者が交流し、絆を深めながら、まちの魅力アピールしました。自治組織が活発化するよう「まちづくり交流会」などの場で課題や要望を

住民同士の 顔の見える関係づくり



住民交流と地域の魅力を発信する「栗林・食の文化祭」には、町内外の約300人が心温まるひとときを過ごしました。

全町民でつくる「笑顔と元気と結の里」

津波被災を免れた山間部の栗林町には、仮設住宅入居者や自宅再建した方々など、新たに住民になられた方々が増え、これまでの地域のコミュニティが変化しています。「栗林共栄会」では、新規住民との融合や仮設住民とのつながりを強め、より良いふるさとづくりを進めるために、市社協と一緒に住民参加型の交流イベントを開催しています。

「食の文化祭」では新しい名産品づくりを含めて町の魅力を発信。「栗林ウォーク」では美しい自然環境の中で、健康と生きがいづくりを発信しました。

平成26年度に町の将来を考える「くりばやし夢プラン」を策定。キーワードは自然、ふれあい、伝統文化、福祉です。住民同士がふれあい、お互い助けあう、後世に誇れるふるさとづくりを目指しています。



釜石市栗林町
栗林共栄会
遠野健一 会長

笑顔と元気と結の里で 初冬の栗林を散策

「食の文化祭」に続いて市社協と栗林共栄会が共催した第2回「栗林ウォーク」は、昨年12月6日に開催。健康増進、閉じこもり予防、住民交流を目標とした初冬の散策には、仮設住宅や自宅再建した住民を含む、町内外から約50人が参加しました。

キャッチし、アンテナを張りめぐらせて、コミュニティの再生・維持に向けて、息の長い支援を続けたいと考えています。

大切な「まちづくり交流会」



地域コミュニティ係
東梅和輝 職員

健康増進や閉じこもり防止を目的に「栗林ウォーク」事業を担当し、私も一緒に歩きました。

栗林町は町内会活動が活発なところ。震災直後は避難所への物資配送や所在確認等に協力し、仮設住宅ができてからは、生活支援相談員らによる見守り活動や閉じこもり防止などにも積極的に協力しました。

「栗林ウォーク」では地元のガイド役が、史跡や文化財等を案内し、住民3者（仮設、新規、既存住民）が交流しながら、地域コミュニティづくりに弾みをつけました。

参加者は体力にに応じて2km・5km・10kmのコースに分かれ、三浦命助之碑や茅沢水車など、まちの自然や歴史、文化にふれました。

なお、「栗林さんぽ路コース」は、栗林共栄会が市社協に相談して平成27年3月に策定。地区住民の健康増進とふれあいの場となっています。



「住んで良かった」「住んでみたい」と思えるようなまちづくり



市社協と栗林共栄会が策定した「栗林さんぽ路コース」を3コースに分かれて散策し、ふれあいを深めました。「栗林さんぽ路コース」の草刈りや案内板設置も住民の手で行われました。

仮設住宅入居者や自宅を再建した新規住民も加わり、初冬の栗林を満喫しました。下段は町内6か所に設置されている仮設住宅。



岩間 淳さん



川崎恵美さん

栗林「夢プランづくり作業部会」
栗林共栄会は新規住民とのさらに、お手伝いできることは努力したい」と笑顔で話しています。

また、大槌町で被災し、平成25年に砂子畑地区に自宅を再建した岩間淳さん（62）は「新しく住民となられた方も増え、妻と娘も近隣住民とふれあいを深めています。第2のふるさと栗林づくりのために、お手伝いできることは努力したい」と笑顔で話しています。

ます。

出発から約1～2時間、スタート兼ゴール場所となった釜石市立砂子畑集会所（さんあいセンター）には、4歳の子どもから中高齢者が次々に到着。昼食時間には、煮込みうどんや地元の団子が振る舞われ、参加者全員に記念品が配られました。

箱崎町で被災し、沢田地区に自宅を再建した小林京子さん（62）は「早いもので栗林に来て今年で丸3年になります。同じ箱崎地区で一緒だった人もおり、近隣住民の皆さんは親切な方ばかりです」と話し、家族の大黒柱として頑張っていることを弾ませました。

なる融合や仮設住宅居住者とのつながりを強化するために、平成26年度に岩手県さんりく基金などの助成を受けて、「地域コミュニティ再生支援事業」などに取組んでいます。一方で「住んで良かった・住んでみたいと思えるようなまちづくり」を目標に、町内から選ばれた20代～50代の地元の有志らが中心となり、将来のまちの設計図を考える作業部会を平成25年4月にスタートさせています。

その後、小学生以上、仮設住宅入居者等も含む全住民へのアンケート調査の結果を基に、栗林の将来像を考える「くりばやし夢プラン」（メンバーは約20人）を策定しています。

夢プランで検討した施策などは、作業部会が取りまとめ、栗林共栄会に提言。意見等は総会や会報で住民に伝えていきます。

「栗林ウォーク」のスタッフとして参加した作業部会の川崎恵美さんは「少子高齢化の進行や若者の就業先の不足など、従来から地域が抱える問題とともに、震災による環境の変化へどのように対処したら良いのか、月1回部会を開いて考えています。できることから着実に、住みよいふるさとづくりに取組んでいきたいと思っています」と話しています。